



視 点

次世代にバトンを

先日、ある市の性教育研究部会の学習会で、主に若い養護教諭を対象として、講演と授業公開をする機会をいただきました。二人の性教協メンバーで、私が講演をし、もう一人は中学生対象の公開授業をし、市内の養護教諭たちが参観するというスタイルです。参加者は10人前後でしたが、真剣に見学していました。講演ではこの機会に伝えることを二つ考えました。

一つ目は、「やってみたいけどどのように進めていけばいいのか」「どんなスタイルでやればいいのか」などに応え、「性教育を堅苦しく考えないでとにかくやってみよう」というメッセージを伝えることです。性教育に取り組みたいが、どんな言い方がいいのか。またどんな切り返し方がいいのかなど、性教育に取り組む場合の具体的な姿が見えない。その不安から脱却するために授業提案をしました。授業では生のやり取り、子どもたちからの質問、どのあたりがわかりにくい、こんな言い方でこんな反応が来るのかなどストレートに参観者に伝わってきます。

二つ目は、教師側の姿勢を含めいろいろな課題に対して具体的に伝えたり、答えたりする、時には同じ内容を伝える場合、言い方を変えることによって相手への情報の伝わり方が変わるということです。「性教育はその教師の人間性が表れる」ということを聞いたことがあります。確かにこちらが構えると児童生徒も構えるし、気楽に接するとそれなりに相手も気楽になっていく、そんな経験をよくしました。

現役の時に一緒に担任した教師と性教育で「ペニス」の用語を使う授業に取り組んだことがあります。その教師が授業後、「ペニスという言葉を使わずに授業しました」と言うので

「でも言わなければ授業にならないのでは」と聞くと「ペニスとは言わず『突起物』で通しました」…。これにはあきれました。正確な用語を伝えない教師の姿勢が問われます。

また、「性器をきれいに」という課題では「汚いからきれいにする」ではなく「大切なところだからきれいにする」と伝えます。「きれいにする」ということの目的がガラッと変わってきます。

若い教師にも性教育をしたいという要求はたくさんあると思います。ただ、イメージがわきにくいということが多々あるのではないのでしょうか。次世代の教師にできるだけ性教育に取り組んでもらうために、また性教育のすそ野を広げるために、少しでもバトンタッチできる機会をとらえていきたいと思います。

*参加者の感想から

- 対等に平等な声掛けをすることは本当に大切なことだと感じました。教師から発信していく、言葉の使い方に気を付けていきたいと思いました。「性別不合」など用語が変わっていることを知らなかったので、知識を増やしていかなければいけないと痛感しました。
- 性教育で扱う成長発達は個人差があるため、学ぶときに当事者でない子どももいる一方で、当事者になるとより学びが深くなることを学びました。今後は「らせん型」の性教育を意識して実践していこうと思います。



岩田 清彦
(和歌山性教協)